

船井情報科学振興財団 留学報告書

2016年6月

荒木 淳

1. はじめに

私は、2012年8月よりカーネギーメロン大学コンピュータサイエンス学部言語技術研究所 (The Language Technologies Institute of the School of Computer Science at Carnegie Mellon University) の博士課程に在籍しています。今学期 (2016年春学期) は二回目のティーチングアシスタント (TA) を担当し、これによりティーチングの卒業要件を満たしました。博士課程も4年目が終わり、研究と博士論文の執筆に注力しています。今回の報告書では、あまり纏まりがありませんが、昨夏のインターンシップの振り返りとこれから始めようとしているボランティアについて触れます。

2. インターンシップの振り返り

昨夏 IBM Research で行ったインターンシップの研究結果が以下の短論文 (short paper) として採択されました：

Abhishek Kumar and Jun Araki. 2016. Incorporating Relational Knowledge into Word Representations using Subspace Regularization. In *Proceedings of the 54th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL 2016)*. (to appear)

ACL は私が専門とする自然言語処理の分野では最高峰の国際会議であり、この学会に論文が採択されたという結果は非常に良かったと思います。また、そのインターンでは論文の第一著者である研究員 (私のメンター) から学んだことも多く、そこで得た知識や経験がその後の私の博士研究に確実に役立っています。なので、昨年6月の留学報告書に書いた、以下の2つの目標を達成することができたと考えています。

(1) インターンシップ中の研究から論文に値するような成果を上げること。

(2) インターンシップ後に博士研究に還元し得るような知識・経験を積み上げること。

しかしながら同時に反省点もいくつか見えているので、自分のインターンを振り返ってみたいと思います。

私のインターンもそうでしたが、アメリカのインターンは通常夏期の3ヶ月間に行われます。日本のインターンと比べれば長いかも知れませんが、研究で言えば論文一本を生み出すための一サイクルに相当すると考えられ、その意味で3ヶ月間の研究インターンというのは普通の大学とは異なる研究環境下での短期決戦と言えます。私のインターンにおける最大の反省点は、私が少し欲張ってしまい、二つの関連する研究課題に同時並行で進めてしまったということです。これまでに研究してきた課題であったり、過去研究が少ない課題であったりすれば、これでもうまくいくのかも知れませんが、私の場合、インターンで取り組んだ課題は自分の博士研究に直接的に関連はなく、かつ近年大きな注目を浴びている分野だったので、結果として自分の力がその二つの研究課題に分散してしまった感があります。これは「たられ論」になってしまいましたが、メンターの専門性を考慮しながら一つの課題に集中していれば、上記の論文をより貢献度の高い長論文 (long paper) にして、私が第一著者になって書けたかも知れません。

総じて言えば、IBM Research での研究インターンシップは、私の博士研究に対して直接的ではないものの間接的に有意義な研究上の視点や技術的スキルを強化することができ、得るものが大きかったです。ただし、インターンの満足度は、インターンにおける仕事の内容、部門や上司（メンター）によって大きく変わるように思います。

3. スタンフォード大学の入試面接官ボランティア

この3月に、スタンフォード大学から西ペンシルベニア地域（私が居住しているピッツバーグ周辺）における大学入試の面接官ボランティアに卒業生として協力してくれないか、という依頼を受けました。今は Ph.D. の取得に向けて研究や博士論文の執筆に注力している最中なので色々考えたのですが、本業に支障をきたさない程度にボランティアを引き受けることにしました。一つは、卒業したスタンフォード大学コンピュータサイエンス学科の修士課程は自分のキャリアを築く上での大きな土台となっており、母校への恩返しという気持ちがありました。もう一つは、そのボランティアは大学入試（undergraduate admission）の面接官なので面接の相手は17歳前後の高校生ということになる訳ですが、それでも彼等を選別するためのスタンフォード大学の人物評価指標を知ることは、私の人物を見る目を養う一助になるのではないかと期待がありました。まず最初に面接官のトレーニングということで、一時間半程度のワークショップに参加しました。受験シーズンに入ると、時間や場所等の希望に照らし合わせて順次面接が始まるようです。

スタンフォード大学は、このような卒業生による大学入試の面接ボランティアをアメリカの国内と国外の両方で展開しています。アメリカの大学入試では試験の点数だけでなく人物評価も重要視するという話はよく耳にします。それでも大学入試でわざわざここまで手間暇をかけて人物を見ようとする姿勢には驚きました。同時に、その姿勢を支えるスタッフとボランティアの協力体制にスタンフォード大学の底力のようなものを感じました。アメリカ人の友人に聞いたところ、こういった試みはスタンフォードだから出来ることなのではないか、という話をしました。詳しくは知りませんが、この友人の言うようにアメリカでもあまり一般的なことではないのかも知れません。

4. おわりに

博士課程も5年目を迎えようとしています。博士論文の執筆とともに、質と量の両面でより良い研究成果を出せるよう日々の努力を継続していこうと思います。